

資料紹介

「島津斉彬公七回忌追善詩歌集」について

山下 廣 幸

平成元年度の第一回黎明館自主企画特別展は、「さつまの和歌」と題し、郷土の「武家の和歌」や「桂園派の和歌」に加え、その他として政治家、軍人などの和歌を紹介するものであった。ここで紹介する資料もこの特別展で展示したもので、島津家二八代斉彬の七回忌にあたる元治元（一八六四）年、周圀にいた人々が追善のために詠んだ詩歌集である。

この追善和歌集は、表紙に「元治元年甲子七月二十日 順聖院様七回忌御追善詩歌」とあり、玉里島津家に伝わるもので、現在黎明館において受託中である。形状は、和紙の袋綴じ、本文六五ページの冊子で、大きさは縦二八・七、横二〇・〇センチメートルである。

ここで、島津斉彬の事績について概略述べる。島津斉彬は、島津氏正統系図によると文化六（一八〇九）年九月二八日、島津斉興の長男として江戸芝藩邸において生まれている。母は、斉興の正室因幡島取藩主池田斉邦の妹弥姫である。弥姫は、斉彬が一六歳の文政七（一八二四）年に三四歳で歿するが、賢察院と呼ばれ幼少時の斉彬に大きな影響を与えた。幼名は邦丸、元服の時忠方で、一七歳になると將軍家斉に謁し、一字を与えられ斉彬と改めた。四歳の時世子となり、曾祖父の重豪から指導を受けるようになった。斉彬が洋学に強い関心を持つのは、この重豪の影響によるところが大きいと言われている。若い頃から蘭語を学び、口

マ字の手紙や日記が残っている。また、高野長英、戸塚静海などのシボルト門下生や箕作阮甫、川本幸民、坪井芳州、石河確太郎、松木弘安などの蘭学者と親しく交流し、蘭学の実用化に努めた。

いっぽう、政治面では水戸の徳川斉昭、越前の松平慶永、宇和島の伊達宗城などと親しく、特に老中の阿部正弘とは親交が厚く、国政についても常に相談をしていた。

このように国際的な知識が豊富で、諸大名とも親密な交流のある斉彬に対し、藩内外から早期に藩主となることを期待されていたが、藩内には父斉興の重臣をはじめ側室由羅など斉彬が藩主となることに反対する一派もあり、四〇歳を過ぎても襲封できない状態であった。

このような状況のもと斉彬擁立派が実力行使を画策し、このことから嘉永朋党事件（お由羅騒動）が起り、斉興は数十人に及ぶ斉彬擁立派を処罰した。この事件後の斉彬の反撃は積極的で、大叔父の黒田斉博、伊達宗城などに協力を頼み、また老中阿部正弘をして斉興の隠退を内諭せしめ、ついに斉興の隠退が実現した。そして、斉彬四三歳の嘉永四（一八五二）年、藩主就任が実現した。

藩主になった斉彬は、開明的な考え方と科学的な知識のうえに立ち、調所広郷を中心にした天保の財政改革の成功による経済力を背景にして

藩政の改革を行い、富国強兵策を強力に推進した。藩内では農業の振興を図るいっぽう、教育と土風の改善にも力を入れ、安政四（一八五七）年には造士館・演武館に対し一〇カ条の論告を出している。

集成館事業では佐賀藩について反射炉を完成し、熔鋳炉、鑽開台、硝子製造工場なども建設した。このほか大小銃砲、弾丸、地雷、水雷、電信機、瓦斯灯、陶磁器、化学用薬品、櫛蠟、樟腦、農具、刀剣、和欧文

字活字、写真などを研究、製造した。

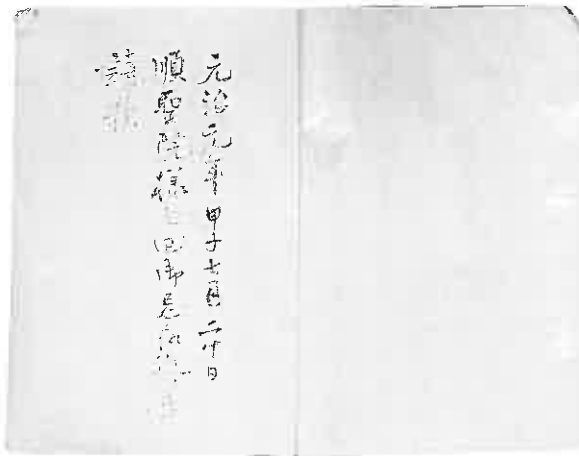
さらに造船にも力を注ぎ、西洋型帆船伊呂波丸、洋式軍艦昇平丸、わが国初の蒸気船雲行丸などの建造を行った。加えて大船建造及び日章旗を船章とすることを幕府に建議し、採用された。

また、国政問題では病弱な將軍家定の継承問題が起こると、水戸の徳川斉昭、越前の松平慶永などと共に一橋家の徳川慶喜を擁立する運動を進めた。安政三年二月には、今和泉島津家の娘篤子を養

女にし、そして將軍家定の正夫人とするなど幕府内部への発言力強化を図るが、親交のあった老中阿部正弘が翌四年六月逝去し、さらに五年には彦根藩主井伊直弼が大老に就任することなどがあり、斉彬の運動は実現しなかつた。

安政五年七月八日、鹿児島に帰国中の斉彬は、天保山の調練場で城下諸隊の大演習を行ったが、翌九日から発熱下痢を起こし、ついに七月一六日、五〇歳で逝去した。斉彬が藩主であつた期間は、わずかに七年半であつたが藩内外に与えた影響は計りがたいものがあつた。

このように斉彬は、政治的、経済的に活躍しながら画や書にも強い趣味を持ち惟馨、惟敬、麟州などの雅号を用い「唐美人図」「雨中牡丹図」「桜島図」「架鷹図」などの日本画やいくつかの書を残している。また、和歌も数多く詠んでおり、先述の「さつまの和歌」展では、次のような歌を紹介した。



表紙の部分



本文の一部

試筆

あら玉のとしのはしめにふる雪はゆたかなる世のしるし成けり

試筆

久かたの空もかすみの立そめてとしのはしめそのとかなりける

初春松

萬代のはるをみとりの色なれやかすミにかへす庭の松かせ

梅花薰衣

折かさす袖もかすミで唐ころもあまるはかりに匂ふ梅か香

朝山霞

いつる日の影ものとかにあさほらけかすみ立そふ春の山のは

名所桜

雲霞か、れとさらにみよし野のやまハ桜の盛なりけり

花雪

きら、かにかすめる春の日影にもきえぬよしの、花のしら雪

夏月透竹

くれ竹の葉分けの風に露ちりてもる影す、し夏の夜の月

泉為夏友

夏しらぬ友なりけりな風かよひしミつなかる、松の下かけ

月前草花

にしきしく花野の露のうへ毎にさやかにやとる秋の夜の月

月前動物

月影のすミ行ま、に小夜更でミねにましらの聲をさひしき

明月如畫

空かける鳥もねくらやわするらむひるにかわらぬ月の光に

海路見月

くまもなく浪路をてらす月影にあわちのせとを渡る舟人

寄鶴祝

松たかき陰にむれるて萬代のことふきちきるわかのうら羈

澄月の影をめてつ、夜もすからしつかさころも打しきるらん

けふの元服を祝して

むらさきのはつ本結に萬代のさか糸をこめていはふことのは

ここでは、斉彬七回忌に寄せられた追善詩歌を翻刻し、当時の人々が
いかに斉彬の逝去を悲しんでいたかを紹介する。

翻刻は、次のような要領で行った。

(1) 原本になるべく忠実に翻刻するように努めた。

(2) 文字は、おおむね現行文字に改めたが、人名については原本のとお

りとした。

(3) 詩歌の番号は、原本には無いが便宜上付した。

翻刻にあたっては、当館の堂満幸子・池田光代両資料調査員に御協力
いただいた。ここに記して謝意を表します。

翻 刻

(表紙) 「元治元年甲子七月二十日 順聖院様七回御忌追善詩歌」

秋懷舊

茂 久 公

1 光陰宛如矢 正値七回秋 往事思難忘 傷然双淚流

久 光 公

2 うかりつることはきのふのこ、ちしてはや七とせの秋は来にけり

忠 公

3 この秋は過し昔のしのはれて落る涙のおきところなき

忠 貫

4 ものいはぬ月にむかひて終夜昔しかたりハ悲しかりけり

久 宝

5 夢かとよ秋も七とせめぐりきていまはた歎く袖の夕露

6 過しよの秋の哀をけふ更にしのふ袂ハわきて露けし
貴年

忠 欽

7 依然日月照三州 吟蛩聲寒引我憂 一去九原車不復 光陰如夢七年秋

忠 敬

8 ませしよの秋を忍ふの涙よりくもりかちなる袖の月かけ

貴 敦

先君七回忌

9 秋恨無端掃不開 梧桐零落夕陽催 玉堂空寂風流少 唯有鳴禽說昔來

暲 姫 様

けい子

10 秋のよの過しむかしを夢かともしのふにあまる袖のしら露

勝 姫 様

かつ子

11 秋のよの月のひかりもくもるなり昔をしのふ袖のなミたに

典 姫 様

とも子

12 今更に露をく袖もかはかぬにはや七とせの秋そかなしき

寧 姫 様

た子

13 たちちねの残しおかれしませ垣に咲もかなしき朝かほの花

もり子

14 誰かまた君かむかしを秋のよの月みて猶も忍ハさらめや

真了院

15 忍はる、涙ハおなし袖なからはや七とせの秋ハきにけり

栄松院

16 ともすれハ昔の秋の忍はれて袖のなミたのかわくまそなき

とも子

17 なき君かむかしをしのふ袖のうへにくもりてやとる秋のよの月

弓子

18 遠さかる御代七とせの秋ふりていと、干かたき袖のしら露

幸子

19 けふといへハ過にし秋のしのはれて猶ぬれまさる袖の夕つゆ

静子

20 何となく袖そぬれける秋の露ときへにし君か昔おもへは

顕寿院

21 みかくれし其面かけをうき秋のゆふへの空に忍ふかなしき

寿鏡院

22 ませしよのつゆの恵ミの深かりしむかしを忍ふ秋のあはれき

鶴寿院

23 露ときえし秋より袖をしほるてふ涙そ君か形見なりける

笑岱院

24 ませし世をしのふなミたの露しけミはや七とせの秋をかさねて

誠名院

25 七とせの秋を送りし夕露にまたもしほる、袖そかなしき

徳寿院

- 26 過し世の御影を今に忍はれて猶袖ぬらすあきのこの比
稲子
- 27 秋の、の草木かうへの露もみな昔を恋るなミたかとみゆ
祐操院
あつ子
- 28 隠れにしミかけそをしきよハの月のこる光ハ世をてらせとも
永瀬
- 29 徒に身ハなからへて七年の君かあと、ふけふのかなしさ
嶋岡
- 30 世にまさはなをいかならん秋をへて光りいやます弓張の月
花岡
- 31 秋くれハいと、むかしの忍はれてかわくまもなき袖の露かな
幾尾
- 32 夢のよと過し昔をいまハ又しのふにあまる七とせのあき
なかつ
- 33 うち向ふ月も今宵ハくもるなりませし昔のあきを忍て
瀧さわ
- 34 白露と消にし君をおもひ出のむかしを忍ふあきのころもて
藤多
- 35 草の葉の茂るにつけて君まし、昔をしのふ秋の夕暮
瀬やま
- 36 むらさきの雲井を夫とおほけなく御影を忍ふ文月の空
染乃

- 37 まし、御代したひまつれ八年へても猶袖ぬらす秋の夕昏
くに子
- 38 七とせの秋をふれともミ恵の露ハのこりて袖ぬらすらん
花江
- 39 おほけなく忍ふ秋にし廻りきていまはた袖の露にくちなむ
八十田
- 40 夢のまにはや七とせのめぐりきて過にし君の秋のしら露
杉農
- 41 夢のよと思ひながらも悲しけれ過にし君か七とせのあき
崎乃
- 42 蓮葉の花のうてなにおますらむ思へハかなし七年の秋
葉山
- 43 言の葉ハまもりくゝて七年の昔をしとふ秋の比かな
うら江
- 44 七とせの秋をしのへハいと、猶哀身にしむ虫のこゑく
常徳尼
- 45 過しよの秋をおもへハつくくゝときりの一葉に物そかなしき
初せ
- 46 露の身にかけし恵の袖のうへも心にしほるうき秋の空
言子
- 47 秋のよの月ハさやかにてらせとも君のミかけのみえぬかなしさ
しけ子
- 48 夢のまにめくるも早き七年の袂にかゝるあきのゆふ露

- 49 ませしよにめて給ひにし朝かほの花も露けき七年のあき
とま子
- 50 朝かほの秋を忘れぬ色ミてもめてにし君かなきそかなしき
か糸子
- 51 七年のけふまで袖をしほるかな君におくれしあきの夕露
さく子
- 52 ませしよのこのかすくおもひ出て猶恐ハるゝ七とせのあき
ふく子
- 53 夢のまに早七年の秋のきて袖の涙そあらたまりける
かめ子
- 54 いつのまにミとせ過して七年となりにし秋の袖の露けさ
まさ子
- 55 悲しきと思ひくし夢のまにはや七年の秋ハきにけり
かよ子
- 56 過しよの昔しのへハいつよりもをきの葉風の音そかなしき
そめ子
- 57 まし、よをしのへハかなし秋草の露もなミたの玉とみえけり
たま子
- 58 いとはやも七とせけふのめぐりきて暗るまもなき秋のこの比
美尾子
- 59 うき秋のはや七年のめぐりきてしのふにあまる袖のしらつゆ
ゆか子
はな子
- 60 夢のまにはや七年のめぐりきて忍ふたもとに秋かせそふく
さち子
- 61 さひしくも身にしミくくと明くれは昔の秋の風そ悲しき
なつ子
- 62 過し世の秋をおもへハはるゝよも心の雨にくもる月かけ
つき子
- 63 小車のめぐりくゝて夢の間にはや七とせの秋はきにけり
こと子
- 64 さためなき風にちりたる朝兎の面かけしとふ秋ハきにけり
いそ子
- 65 道あらハたつねもゆかん大空にみし影しのふ露のよの君
きそ子
- 66 紫のくもにかくれし七年のむかしの秋ときくそかなしき
かち子
- 67 雲のうへにまします君としりながら猶なけかるゝいにしへの秋
たけ子
- 68 七年を過にしあきのかたみとて露にぬれつゝさける朝かほ
やち子
- 69 夢のまにはや七年の秋のきて昔をしのふ袖の露けさ
とま子
- 70 此あきはいとゝむかしのしのはれて露をきまさる袖のうへかな
早崎七左衛門娘
ちを子

71 打忍ひなけとかひなき我袖の涙なそへそ秋のよの月

桂李右衛門祖母

菊水

72 亡君もはや七とせのめぐりきて忍ふにあまる袖のしら露

右同

73 すむ月にむかしの秋の忍はれていと、淋しき十六夜の空

栗原又榮

信充

74 おもひきや神のミあとをしたひきてけふのみのりを音にきくとは

比志嶋静馬

範軽

75 七年にめぐりきにけり此秋のなミたにくもる有明のつき

右同人

76 いつくにか君ハますらん紫の雲にかくれし七とせのあき

豎山武兵衛利秋

77 かへりこぬ君を忍へはくもりなき月もやくもる心地こそすれ

入来院 恰公寛

78 過し秋のあわれをしのふ袖の上にはらひもあへす露そ置そふ

龜山甚之丞良壹

79 影もなき月ハそのよの天空にひかりハさらになくそ悲しき

中山次左衛門実美

80 回来て仰く袂の殊さらにつゆをき増る文月のそら

山田十介有裕

81 七年如一夢 秋色轉傷魂 對月仰遺德 臨風懷舊恩 草蟲吟共咽

竹露淚同繁 感嘆情何極 幽泉渺九原

大久保一藏利濟

82 つく／＼とききは夕の虫のねもあきとはかりは鳴ぬ声かな

養田傳兵衛長胤

83 ませし代もおなしき秋の月かけを仰はむなし袖の露けさ

東郷長左衛門実敬

84 神のよの恵の露に民草のかゝるむかしの忍ふけふかな

伊木七郎右衛門常武

85 倚杖徘徊仙巖邊 帳然懷古哭秋天 于今江上垂綸處 風景依々似舊年

右同人

86 いつまてかかひなきいのちなからへて秋にあふことに袖しほるらん

鹿嶋郷十郎国成

87 澄月のひかりハ今にかわらねとむかしおもへハおしき秋かな

川上十郎兵衛親雄

88 天地にか、やく玉の御光のやミし昔の秋ゆかなしも

十三才

89 なき君のめぐみの露にぬれにけりむかしを今に七とせのあき

比志嶋隼人範方

90 歎きつゝ露にも袖をしほるかなはかなき秋の月をなかめて

桂李右衛門久温

91 さらにまたなけきのもりのした露のをきそふ秋に成にけるかな

山口彦五郎利雄

- 92 朝かほの花によそへて忍ふかなみしか、りける御代のさかりを
高崎伊勢 正風
豎山八郎利器
- 93 あちなく昔をしのふ袖の上にこぼる、露ハなミたなりけり
町田佐次右衛門衷美
- 94 なき君を雲の行氣にしたふにもいく秋かせを袖にしむらん
谷村孫右衛門純一
- 95 はかなくてかくれし月の影故に悲しき物となれる秋かな
數根良助賀盈
- 96 なき跡をしのひかへせはみし秋の夕の空のけふりかなしも
右同人
- 97 ませしよを忍ふる秋のわか袖ハなミたの露そおき所なき
須磨敬次郎季良
- 98 遺恨山河満 風煙悲昔年 飛揚七回夢 紅淚濺旻天
町田龍右衛門実職
- 99 水茎の岡のやかたも今はそのむかしを忍ふ文月の空
鎌田小十郎政純
- 100 我袖の露にくちしも七とせのむかしの秋と成にけるかな
時任武右衛門為徳
- 101 照月のかけにむかひてませしよをおもふもかなし虫の聲く
山田良介有祐
- 102 此秋は月もなミたやこほしけむち、におきそふ露のしら玉
村山下総時村
- 103 秋のよの月すむ空を詠てもとほさかりゆく君をこそおもへ
福崎助七季連
- 104 天地も君かむかしや忍ふらむ野にも山にもあまるしらつゆ
和田孫右衛門盤春
- 105 草木もうきよの中としほれつ、歎し秋もけふにやハあらぬ
右同人
- 106 数くにしふ昔の秋みえてきりの一葉もおちはしめつ、
後醍院彦次郎真柱
- 107 七とせをしたひうらふれ更にまた袂露けき秋のむらさめ
東郷源四郎実美
- 108 七とせの秋こそかへれ天の川涙と、むるしからみそなき
指宿市介資綱
- 109 秋ごとにおく白露やいにしへをしのふ袂の雫なるらむ
右同人
- 110 行系なき玉の御かけをしとふまにはや七年の秋ハきにけり
相良量右衛門長紀
- 111 また更に秋にはなりぬさらてしもかハかぬ袖をしほるけふかな
平山龍助季雄
- 112 常ならぬ秋とや庭のまつ虫も聲のあはれをつくしてそ鳴
三原次郎左衛門経世
- 113 折に逢はあわれもふかき十六夜の月にしくる、我涙かな
右同人
- 114 かくれにし君か御影のしたわれてそ、ろに秋はかなしかりけり

- 115 関山新兵衛金満
みゆくへをたつねわふらむ心地して吹こゑ悲しあきのはつかせ
- 116 野崎良八郎廣丈
君か代の秋にもあらぬ秋をへてなと露の身の消残るらむ
- 117 黒田甚左衛門清保
袖くちし昔おもへハ更にまたかなしき秋の露そこほる
- 118 田中蘇八郎国賢
めくりきてはや七とせの秋といへは袂の露のかわく間もなし
- 119 右同人
七とせの秋をおもへハ袖の上になミたの露のをき増るなり
- 120 西直八郎長和
此秋ハわきて草葉も露ちりてともにむかしを忍ひかほなる
- 121 肝付矢七兼底
いとはやも悲しき秋のめぐりきてかはかぬ袖を又ぬらしけり
- 122 右同人
甲斐もなくよになからへて七とせの秋に逢こそかなしかりけり
- 123 市来勘十郎正雄
君かむかし忍ふ涙に大空の月のひかりもくもるあきかな
- 124 大山弥九郎綱長
みかくれしおなし月日の廻りきて袖にあまれる秋の白つゆ
- 125 比志嶋孫四郎国義
ませしよを忍ふむかしも此秋ハわきてやそふる袖の露けき
- 寺田平之進真柏
- 126 黒江喜右衛門景範
秋かせの吹にし日よりなき君を忍ふにあまる袖の露かな
- 127 驚頭喜兵衛永吉
歲月如流莫久淹 七回復見一輪蟾 恭仰 神威懷舊事 秋風吹袖淚頻霑
- 128 清水源兵衛義方
みちあまることしのあきの白露ハむかし忍ふの涙なりけり
- 129 一世英名四海聞 噫天何意喪斯文 秋風灑盡七年涙 空拜玉龍山上雲
前田勇左衛門稻足
- 130 秋野、の千種かはなにこと、へはこたへぬ色に露そこほる、
右同人
- 131 十六夜のむかしの月を詠れハうき世の中そはかなかりける
赤塚吉右衛門真精
- 132 かしこまる玉たれの戸の秋かせに衣手さむし君いますらん
渋谷彦介国安
- 133 みめくミの露のやとりに袖ぬれて昔の秋を誰かしのはむ
河多源左衛門実美
- 134 さ、かにのいとはやめくる七秋の哀ハ軒のしのふにも見ゆ
重田郷左衛門正文
- 135 御隠れし秋のいつしか帰りきて露の袂をしほる悲しき
国分平寛友俊
- 136 大王も君かみかけやしたふらん雲井さひしきあき風ぞ吹
沙門寂園
- 137 としことに君をしたのはぬ秋もなしさやけき月を面影にして

關東太郎盛長

ことし元治はしめの秋

照国大明神の七めぐりの 御祭つかうまつらせ給へる

につけて秋の懐旧といふことを人々よみて奉るへう

仰言をかしこみ奉りて

今も世を照しますすらん月なからうつ、にみえぬ影そかなしき

た、ならぬ雲のけしきを詠めてもかくれし月の往方をそおもふ

くもりなき影にたくへて秋ことに仰くもつらし雲の上の月

中村瑞伯兼昌

遺論赫々西洋傳 攻守神機今儼然 君去秋霜既七稔 空垂悲淚獻香煙

右同人

七とせの跡は夢地の心地して月に物おもふ秋のよなく

なき玉をしのふ哀れも且しらてたれまつ虫の音のミ鳴らん

秋野の花に涙をかけそへて手向る神よ哀とをしれ

長井齊藏実庸

ませしよを忍ふ袂ハぬる、ともくもらてみせよ十六夜の月

右同人

けふといへは皆ミつの国草木迄ませしむかしのあきや忍はん

詠れハませし昔の忍ハれて涙にくもるあきのよの月

七とせの秋にも早くめぐりきてませし昔をしのふあわれさ

東郷七郎右衛門実祐

歎つ、過しむかしの忍はれて哀もよほす露の夕くれ

吉田喜兵衛清国

150 さやかなる月をしミれば君か代の昔の秋そ忍はれにける

新納良輔実枝

151 有明の月こそくもれ古を忍ふいふきの霧や立けむ

新納台介実貫

152 おしなへて昔のあきを忍へはや月夜よ、しといふ人のなき

吉田喜兵衛清国

153 此あきは哀むかしを思ひ出て袖に涙のをちぬ日ハなし

是枝幸左衛門生胤

154 此ころは何につけてもかなしきにむかしなからの鈴虫ぞ鳴

築崎彦二純明

155 虫までも聲ふりたて、ねにそ鳴昔の秋のかへりきぬれハ

田代太郎太清趨

156 ミ行への西のかたよりふく見れハかつはゆかしき秋のかせかな

矢野金次郎秀雄

157 七とせを過ごし秋の月と、もに雲かくれにし君をしそおもふ

日高源之助為賢

158 たそかれと仰し君の光りこそ千世はふるとも日に新なり

東郷嘉一郎実幹

159 過し世の秋の哀も忍はれて涙のほかにことの葉もなし

久保彦助安靖

160 つれ／＼と思ひわすれぬ月草に涙もつゆとおつる秋かな

伴斧二郎照常

161 仕ぬる其古の忍はれて涙にくもる秋のよの月

- 162 長野仲右衛門祐胤
御輿守もりかへさんとむらさきの雲井の秋を詠つるかな
- 163 西郷友右衛門廣胤
なきかけの昔をしたふよの中の人のなミたや野へを染らん
- 164 山城新兵衛祐脩
萩の葉を吹あき風のそよさらにもかしを思ふ夕くれの空
- 165 園田彦五郎実廣
此あきは草木かうへも悲しけれ露も涙の心地のミして
- 166 宮内清一郎維平
大御かけ仰はたかき白雲の跡なき空にすめる月かな
- 167 是枝幸左衛門生胤
つれつれとむかしおもへハきり／＼す有明の月に啼そめにけり
- 168 原田助次郎豊秋
人皆の神よりかけて草も木も秋はつゆけく成やしぬらん
- 169 本田岩次郎親賢
天のしたふじ、みいつの大御影ままとなくく秋のミにして
- 170 萩原孝左衛門政躬
忍ふそよ仰はかなし初秋の月にわすれぬ君か面かけ
- 171 矢野金次郎秀雄
恨てもなきてもつらき月日かな猶七とせの秋のなミたを
- 172 鶴丸弥兵衛資福
奉ること葉のなミたしくれけり君かかくれし秋をおもへは
- 173 鶴木彦十郎政隆
- 174 君をのミ忍ふむかしの秋なれば虫のねさへも悲しかりけり
- 175 飛弾人 中嶋清左衛門載陽
ありしよの秋をしのへハ心なき葎も露にしほれぬるかな
- 176 大乗院 戒惠房 亮譽
此あきもかへらぬ君かいにしへを忍ふの露に袖はねれつ、
- 177 税所孤梅院
秋のよの月もかひなくかきくらし君をしのふの村雨の空
- 178 右同人
よろつ代といのりし君はさそひこて秋のミかへる萩の上かせ
- 179 大乗院 戒惠房 亮譽
秋毎にしふミかけはみえもせて露のミかゝる墨染のそて
- 180 中村瑞伯兼昌
靈祭る袖にしくる、秋の雨ハ花よりもろき涙なりけり
- 181 山野田彦介政文
此秋の月は涙にくもれとも澄し御玉ハさやけかりけり
- 182 西郷庄八郎房敬
草木まで夕かなしく見ゆる哉なれもむかしの秋をしるらん
- 183 岩切喜次郎実光
月影も鳴むしのねも此秋は聖の君に替てかなしき
- 184 野津休右衛門親章
ませし世の秋のそのよの忍はれて涙にくもる袖の月かけ
- 185 町田作左衛門実敦
夢のまにはや七とせの秋のかせよそにはさそや吹わたるらん

- 185 なき君かうへのミかたるこ、ちして殊にかなしきむしのねそする
赤塚彦太郎真積
伴斧二照常
- 186 老ても猶なからへて七年の秋をしのふの袖のしら露
桐野仲右衛門利貞
- 187 秋のよの月にむかしの忍はれて面かけきゆるときの間もなし
川上彦十郎親満
- 188 七とせの昔の秋ゆひたふるにしぬひ奉れば涙くましも
西郷友右衛門廣胤
- 189 くる秋の露よりさきに置物ハ昔をしのふなミたなりけり
伊東勘兵衛祐国
- 190 うしとみし昔の秋のくまなうて月にはかゝる雲なかりけり
黒田彦左衛門清兼
- 191 そのかミのかなしき秋の忍はれて今はた更に袖そぬれける
山本孫兵衛親善
- 192 そのかミをしのふ心に堪かねてなミたひかたき七とせの秋
川畑宗之進清流
- 193 天にすむ鳥もくたらん桐の葉をなと秋かせのさそひ果けん
汾陽真一兵衛真一
- 194 東路の野にふす業もしられけり都にさわく初雁の聲
右同人
- 195 君ませし秋にかわりハなかりけりくもらぬ空の望月のかけ
重野厚之丞安輝
- 196 平生煦娟最多 恩 剩見胎 謀主攘尊 華萼樓高推至愛
鶴龍座近拜 温言 鶴城 鶴去老松色 袖浦袖霜秋雨痕
夜月廟門咸仰止 巍然二字映乾坤
白尾元泰幸宏
- 197 其秋をしのふ袂にくらふれハ草木ハ露のこほれさりけり
山元蘇仙盛行
- 198 風の音虫の音につけそほちぬる袖やむかしの秋をしるらん
田代意名清容
- 199 虫の聲きくにつけてもうき秋の昔をしのふ袖のしらつゆ
渡瀬玄悦正慶
- 200 萩すゝきおく白露のかすくゝにむかしを忍ふ月そ悲しき
清水補拙義喬
- 201 めくりこし秋のむかしを忍ひつつ猶おきそふる袖の夕つゆ
秋風吹木葉 懷舊自傷心 多少悲愁淚 潜然更濕襟
蒲地喜仙雀樹
- 202 殊さらにひかり尊しあきの空
池田龍悦
- 203 そのかミの秋に心のかよへはかおとせぬ風も身にはしむらん
冲瑞益
- 204 折に逢へハなれ聞く萩の葉音さへみにしミ増るけさの秋かせ
山下龍雲兼濟
- 205 一瞬七裘葛 正逢涼月辰 昔時真叡主 今日乃 明神 仁政兒童識
曠懷蠻貊賓 偉哉西郭裏 玉殿向南新

- 207 夢のまもわすられかたき哀さのひとしほまさる七とせの秋
右同人
東郷泰玄実樹
- 208 ませしよの秋をしのふの軒端よりみたれて袖にかゝる夕露
渡瀬幽察正峯
- 209 七草の花そ涙の手向なるはや七とせの夢の世の中
渡瀬玄仙正衛
- 210 秋の月むかしをとへ八中くゝに影みえわたる萩のしら露
不断光院 安譽
- 211 うき秋のちくさの露も在世しむかしをしとふなミたなるらん
川畑宗之進清流
- 212 大空の月にむかへは負気なきみさへ涙のあまる秋かな
西之原甚左衛門友愛
- 213 天津日の影ともみてしませしよの秋を思へはくやしかりけり
本城中右衛門輝廣
- 214 過し世の秋の夕をさまくゝに思へハ夢の心地こそすれ
小田善之進為常
- 215 今日といへは昔の秋や思ひ出てお花か本に虫も鳴らむ
矢野次郎右衛門倫尚
- 216 数ならぬ身にさへ秋の風立てむかしの君の思はるゝかな
鎌田真助政泰
- 217 大かた八月と花とになかれても昔をしのふ秋にそ有ける
谷村 雲啓
- 218 其かミの秋をかなしみ久かたのあま雲かくれ月もてるらん
稻留源左衛門豊海
- 219 石木たにおをもなくへき秋なれやとりかえされぬ昔おもハ
樺山巖五郎資始
- 220 過ぎつるむかし思へハ秋かせのふりても袖の露そこほるゝ
竹廻弥兵衛経則
- 221 むかし思ふ秋の夕の悲しさをしのひかねてや虫も啼らん
押川乙五郎則安
- 222 思ひ出る昔はかりハさやかにてはるゝ時なき袖の月かな
市来平太政精
- 223 有しよを忍へハ秋の白露もわか涙よりをくかときちる
仁礼彦一郎景明
- 224 あふくにもあやにかしこしよを照すみかけハ今も有明の月
和泉弥平太氏高
- 225 歎てもかへらぬ秋としりなから忍ふにあまる昔なりけり
内藤平蔵兼善
- 226 したひつゝ、虫も鳴ねやそふるらん雲にかくれし月のむかしを
清水半左衛門常臣
- 227 幾秋を過し昔もきのふかとまた袖ぬらす草の夕露
梶原清右衛門景中
- 228 月と日のめくるもはやき七年のうき秋かせに又もふかれつ
福永藤左衛門祐之
- 229 その秋のかせの音してよの中ハまくつか原の露そ散ける

相良左衛喜長利

230 千代までと思ひしものをはかなくも袂しをる、七とせの秋

河野仲次郎通高

231 な・とせの昔の秋を忍ひてや草むらことに虫も鳴らん

友野七郎左衛門長賢

232 夕煙むせふ思の消ぬまに七とせめくる秋ハきにけり

山本十太郎国郷

233 草ならぬ袖にも露ハミたれつ、昔のあきをしのふもちすり

中西十郎左衛門秀厚

234 此秋ハ猶もむかしのしのはれてなくやなけきの杜の空蟬

小田十郎右衛門為善

235 けふハ又三の御国の家ことにむかし忍ふのあき風ぞ吹

花謙藏尚勇

236 うれしくもませし御世そとみしハ夢さむれハ悲し秋のはつかせ

右同人

237 秋のよの月の光りハ清けれと忍なミたにくもりかちなる

野村傳左衛門正常

238 さやかなる秋の空にも御行彖の跡たに見えす悲しかりけり

松方助左衛門正義

239 かきりなく忍ふ涙ハつき果て心ハかりをしほる秋かな

奈良原幸五郎繁

240 秋の、に御狩た、して民草を恵ミませしもむかしなりけり

谷村小吉昌武

くれ竹のよにおくれ奉りしよりとこやミにして墨染ならぬ

露の身もひとり思ひへたてし心地のミせられて空蟬のから

になりたるさまに覚ゆめり総角なりけるころよりつかへな

れ奉りかけまくもかしこき文武の道をさえ御ミつから御教

をか、ふり奉りしかたしけなきはとし月をふるにつけつ、

いよ、身にしミとをりかうもたくひなきふかき御恵をうけ

し身のいか、ハして報ひ奉らんさはいへませし御代よりと

かく何くれのうへにつけつ、あめかしたつねにしもあらさ

れは御心ふかく憂へさせ玉ひていにしへの名た、る人々に

もおさく、おとり玉ハぬまめなる御心かきりなふおはせし

ことやんことなき御あたりまでも聞えわたり御稜威は遠き

かのきたなき夷のこらまでも仰きしたひ奉とかやさハかり

名た、るひしりの君をいかなる禍つ神におふハれ玉ひけむ

世をはやふし給ひしはあな情なのかきりなりやまして今ハ

の御時中将の君のしたしう仰おかれし事おはせしとかかう

筆をとるさへそ、るなみたにむせひぬれは言葉のあとさき

をさへしらす昨日の瀨瀬も飛鳥河とかわる世のならひなか

らいまく、しういみしきまでに浦安国の名もあら磯さきのさ

まにかハりはてつるをよそにみやり玉はぬこと忍ひたへ玉

ハす今 御ふたりの君達仰あはせて 中将君

はるく、いくたひか玉敷の都へのほらせ玉ひ征夷府の東ま

ても下らせ給ひまめなる御心のかきりつくさせ給ひしかハ

やんことなき御あたりよりいにしへにもためしなき

- 249 承恩曾侍鳳凰樓 追慕往事墜淚稠 浩氣依然正如在 星霜既閱七回秋
 248 亡君如在仰仁風 往事回看一夢中 秋色蕭々月明夜 傷心流涕思無窮
 瑞 益
 247 墨染の衣の袖にかゝるかな君のミしのふ秋のしら露
 意 石
 246 一夢七晷霜 秋風無限意 夜深零露多 不及思 君淚
 沙門寂園
 245 今更にすきし昔を忍ふにも夢かとたとる七とせの秋
 伊佐敷道興
 244 七とせの秋を思へはいつよりもかなしき増る萩のうハ風
 山本五百助盛珉
 243 242 241 ぬらしつるかな
 さらてもかわかぬ袖を朝顔のまかきの露にぬらしつるかな
 今日といひ昨日とくらしなからへていつの秋迢袖しほるらな
 ふたつなき君におくれし夕より秋をつねとも成にけるかな
 のけしきも霧たちこめてあはれなる事のミなりかし
 もならせ玉へとはつ雁かねのさそひのこし奉り鳴わたる空
 おもひつ、け奉る程二小車のめくりてはやき七とせの秋に
 しき事になんなりはて、せんすへもなきまか事いか、ハせ
 んうちななきあるハはをかむより外なければむかし恋しう
 緞感あるは賜ものいく度となふかたふらせ玉ひ東のおほひ
 まふち君よりもかすくのかしこき事おわせしとなりしか
 はあれととかくなかれはてぬる時勢にしていたくいまく
 251 秋風冷處暮鴉鳴 獨感明靈遂歲戚 夢裏光陰去如箭 哀哉天下大英君
 250 英魂何處在 仙路望悠々 餘光留霽月 遍照錦江光
 名島直信